

在日フィリピン人の1.5世代
——日本は定住地か、それとも通過点か

高畑 幸・原めぐみ

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第13巻第1号（2014年9月）抜刷

【論文】

在日フィリピン人の1.5世代 ——日本は定住地か、それとも通過点か

高畑 幸・原めぐみ

要約

本稿は、在日フィリピン人1.5世代、すなわち10歳前後で来日し、フィリピンと日本の地域社会および教育環境で育った青少年14人の生活史をもとに、彼（女）らの家庭および学校での適応、高校進学、その後の進路について明らかにすることを目的としている。彼（女）らの語りから、在日フィリピン人1.5世代の特徴は、(1) 来日前にフィリピン語および英語を学習言語としていること、(2) 母親の再婚家庭への参入、の2点だと言える。キャリアパスとしては、日本での定住のほかにも、日本を通過点としてフィリピンあるいは英語圏の第三国（アメリカ等）への進学や就職を目指すという選択肢があることが強みとなる。調査対象者らが語る「日本＝通過点」論は、日本社会への適応・定住が移民の子どもの成功モデルであるというこれまでの議論に一石を投じるであろう。ただし、来日前の学力形成および来日後の学歴達成は、家庭の文化資本および経済的安定性に左右されることに留意が必要である。

1. 問題設定

在日フィリピン人1.5世代の来日後のライフコースを概観し、他国における1.5世代の状況との比較軸を作ることが本稿の目的である。移民の1.5世代とは、大人になってから自らの意思で移動した1世とも、移住先で生まれた2世とも異なる移住経験をしていることから、新たな世代カテゴリーとして使用されてきた（長坂格 2013）。本稿では、1.5世代概念を世代カテゴリーとして使用するとともに、「移住時年齢で緩やかに定義しつつも、それらの人々が少なくとも二つの国と地域社会で社会化されてきたことを意識化・焦点化させるための発見的な概念として用いる」（強調は引用者による）とする長坂（2013）の議論に依拠するところが大きい。

現在、日本において「ニューカマー」と呼ばれる、1990年代以降に来日した外国人児童生徒は2010年をピークに減少傾向にあるが、その中でフィリピン諸語を母語とす

る者のみが増加傾向にある(文部科学省 2013)。また、フィリピン外務省管轄の在外フィリピン人委員会(Commission on Filipinos Overseas)の統計を見ると、2005年より毎年500人~800人の若者(13歳~19歳)が来日していることがわかる(CFO n.d.)。

在日フィリピン人1.5世代の特徴は、日本が家族単位の移民を積極的に受入れないために、来日経緯が多岐にわたることにある。したがって、本稿ではまず彼(女)らの来日要因を3つに分類することにより整理し記述したい。その後、来日前のフィリピンでの生活、来日経緯、来日後の再婚家庭あるいは再統合家庭への参入と日本での定住志向に注目し、複雑な家庭環境の中で、彼(女)らがいかにして自分の進路を切り開いていったのかを、彼(女)らの生活史および語りから詳述する。

3類型の中で特に「呼び寄せ」の事例では、先に来日した親からの仕送りによって現地で中間層の生活をしていた場合、子どもは十分な教育を受けて基礎学力が形成され、フィリピン語および英語を学習言語として獲得していることが多い。その場合は、来日後も英語運用能力を文化資本として高校進学を果たしたり、高校卒業後にフィリピンの大学へ進学する、あるいはアメリカ等の英語圏へ進学・就職するなど、選択肢が広がる。ただし、それは個人の努力、家庭の安定と周囲の支援等、偶発的要素に左右されることも多々あることに注意したい。

従来、教育社会学や異文化間教育の分野では、日本への適応と日本での教育達成を「望ましさ」と設定していた。つまり同化的な教育施策が議論の土台になってきた(佐藤郡衛 2010)。しかし、実際には日本での教育と就労を経て第三国へ移動する、もしくは積極的に本国に帰って高等教育を求め、というライフコースも想定されることに言及したい。「日本=通過点」論は、日本への同化——日本語教育を受けさせ、日本文化を理解し、日本の教育制度に乗っ取って高校/大学に進学させること——によって、社会経済的上昇が可能になるという従来のモデルへの挑戦となると考えている。

2. 子ども移民の教育に関する先行研究

樋口直人らの研究グループは、国勢調査データを用いて、在日外国人の教育、労働、社会経済的地位について明らかにしてきた。それによると、在日フィリピン人の子どもたちは「ブルーカラーの日本人父と専業主婦またはブルーカラーのフィリピン人母のもとで暮らすことが多く、特に学齢期の途中で来日した子どもたちの進学率が低い」と位置付けられている(高谷幸ほか 2013)。日本の主要なエスニック集団間で青少年の高校進学率を比較すると、韓国・朝鮮人(在日コリアンを含む)と中国人は比較的進学率が高いが、フィリピン人、ペルー人、ブラジル人にとって高校進学ハードルは高い(大曲由起子ほか 2011)。やはり漢字文化圏出身者は日本での学力形成と高校

在日フィリピン人の1.5世代

進学に有利なようである。

在日フィリピン人研究といえば、第一世代が極端に女性に偏っていたため、従来はジェンダー論からの研究が多かった。しかし、近年の1.5世代および第二世代の増加に伴い、彼（女）らの子育てならびに教育の問題を扱う研究も増加してきた（高畑幸2012；矢元貴美2014）。

まず、親の果たす教育役割について論じているのが、敷田佳子（2013）、三浦綾希子（2013）である。敷田（2013）は、在日の国際結婚家庭の家庭内言語と文化を調査し、「日本志向」「母国志向」「両立志向」に類型化した。「日本志向」では日本での学歴達成（大学進学）が可能になる。一方、父母双方の言語・文化を継承させたいとする「両立志向」では、外国人母が主体的に教育に関与するが、日本の学校では同化志向が強いため、海外留学やエスニックスクールへの進学を検討することが多い。また、三浦（2013）は、家事労働者のフィリピン人女性らがいかに教会などのネットワークを子どもの教育資源として利用しているかを記述した。いずれも子どもの教育への親の営みを描いており、フィリピン人の親がいかに日本で教育戦略を立てているのかを理解することに役立つ。

一方、徳永智子（2008）、高畑（2011）、額賀美紗子（2012）、原めぐみ（2011, 2013）は、研究・調査する上で子どもの視点が重要であるとし、子どもや若者へのインタビューと子どもらが通う学校や日本語教室でのフィールドワークから、彼（女）らを取り巻く日本の教育のあり方を問うてきた。徳永（2008）は、フィリピンからの「呼び寄せの子」は、フィリピンへ仕送りをする必要性が低い家庭ほど日本で教育投資が可能となり、アメリカ等、英語圏で働く叔母が子どものロールモデルとなり第三国への再移動を促進するという。そして、彼（女）らに対し日本国内での高校進学だけを目的とする制度や支援の限界を示している。

また、原（2011, 2013）は、日本人の父親をもちフィリピンで育った15歳以上の日系フィリピン人青年に注目した。彼（女）らは来日しても、日本では義務教育年齢が過ぎており、中学校への編入および高校進学は極めて困難である。そのことが父の国からの構造的な疎外感を持たせ、アイデンティティの問題に大きく影響するという心理的側面を事例から浮かび上がらせた。

高畑（2011）は、10歳前後で来日した在日フィリピン人1.5世代の「呼び寄せの子どもたち」を調査対象とした。1.5世代の高校進学は、個人の努力もさることながら、日本人継父による教育投資や公立高校入試の外国人特別枠の有無などが左右することを示した。また、額賀（2012）は、国際結婚家庭と日系人家庭の子どもを対象にインタビューを行い、フィリピンの親たちは高い教育期待を子どもにかけ一方で、子どもの家庭学習に対し実質的な教育関与をほとんど見せなかったとし、こうした家庭には学校や地域社会からの支援が必要だと強調する。

これら先行研究をまとめると、日本ではブルーカラー家庭で育つフィリピン系の子

どもたちが多く、親は子の教育達成に期待するものの具体的な助けができないこともある。したがって、家庭や学校での学習支援に加え、制度的支持（高校入試の外国人特別枠）の有無など、さまざまな社会的条件が彼（女）らの日本での高校進学を左右していると言えるだろう。子ども・若者たちの視点を重視するというスタンスは同じだが、上記にあげた各研究の調査対象は少しずつ違う。これらを全体的にまとめ、それぞれの社会的背景を整理する必要がある。その上で、日本での適応と同化、日本での教育達成と進学だけでなく、その後の進路決定において、「定住」という前提とは異なる方向を見いだした若者たちの生活実践を記述分析していくことが本論の試みである。

3. 移住経緯の3類型

聞き取り対象とした1.5世代の青少年は、10歳前後で来日し、日本で学校教育を受けた後に現在20歳以上となったフィリピン出身の人びとである。機縁法でデータ収集を行った。日本語、フィリピン語、英語のいずれかで1～3時間の半構造化インタビューを行い、その音声データを文字起こしした。事例一覧を示したのが【表1】である。属性主義的な移住（家族の呼び寄せ）が主たる来日経緯だが、呼び寄せられる子どもの背景もまた多様である。具体的には、移住経緯は以下の3類型にまとめられるだろう。

表1：在日フィリピン人1.5世代の事例一覧

No	仮名	性別	調査年	生年	移動のプロセス	来日時 の年齢	調査時 の年齢	国籍	居住地	学歴達成	調査時の職業	今後の進路・定住
1	ブライアン	M	2010	1987	(A) 母親の前夫 (内縁含む)との子	14	23	フィリピン(日本に帰化申請中)	中部地方	日本で高校卒業	正社員(企業内通訳)	(1) 日本で定住・帰化
2	チェリー	F	2010	1982		13	28	フィリピン	西日本	日本で高校2年まで中退後、フィリピンに戻り大学卒業	2010年に日本に戻り、小売業アルバイト	(4) 第三の国へ移住希望
3	ダイアナ	F	2010	1987		13	23	フィリピン	中部地方	日本で大学在学中	大学生	(3) 日本で大卒後、グローバル人材
4	エミリー	F	2010	1986		12	24	フィリピン	東日本	日本で高校中退	契約社員(携帯電話営業)	(1) 日本で定住・帰化
5	フローラ	F	2010	1991		10	19	フィリピン	東日本	日本で高校卒業	職業訓練校を卒業後、介護施設で休職中	
6	グロリア	F	2010	1989		12(5)	21	日本(帰化済)	東日本	日本で高校卒業	パート労働(事務職)、産休中	(3) 日本で大卒後、グローバル人材
7	ハンナ	F	2012	1989		14	23	フィリピン	中部地方	日本で大学在学中	大学生(就職活動終了、総合職の正社員として採用内定)	
8	イアン	M	2010	1989		14	23	フィリピン(日本に帰化申請中)	西日本	日本で高校卒業	会社員(製造業)	(1) 日本で定住・帰化
9	ジョーダン	M	2012	1990		9	22	フィリピン	東日本	日本で大学在学中	大学生(就職活動終了、システムエンジニアの正社員として採用内定)	(3) 日本で大卒後、グローバル人材
11	リンダ	F	2013	1992	(B) 日本人移民の子孫(日系人)	13	20	フィリピン(日本に帰化申請中)	西日本	日本で大学在学中	大学生	(4) 第三の国へ移住希望
10	ケイト	F	2012	1990	(C) フィリピンで育った日本人	13	22	日本	西日本	日本で大学在学中	フィリピンで大学生、現在は日本へ交換留学中	(2) フィリピンで大学進学
12	マイケル	M	2013	1993		13	20	日本	フィリピン留学中	フィリピンで大学在学中	大学生	
13	ノリ	M	2013	1995		14	19	日本	中部地方	日本で中学卒業	派遣社員(製造業)	(1) 日本で定住・帰化
14	アイダ	F	2010	1989		11(7)	21	日本	東日本	日本で短大卒業後、フィリピンで大学進学予定	無し(留学準備中)	(2) フィリピンで大学進学

*カッコ内の数字は、幼少期に日本滞在時の年齢。

在日フィリピン人の1.5世代

まず、「類型A：母親の前夫（内縁含む）との子」である。フィリピン人父母のもとに生まれたが、両親の離別後に母親が日本人と再婚し、日本で定住後に子どもを呼び寄せたことにより来日したフィリピン国籍の子どもたちである。在日フィリピン人1.5世代の来日経緯としては最も多い。母親が再婚する前に、日本で出稼ぎ（エンターテイナー等）をしていた事例もある。詳しくは後述する。

「類型B：日系人」は、戦前にフィリピンへ渡った日本人移民の子孫である。1990年の入管法改正に伴い来日・定住が可能となったが、フィリピン日系人の来日が本格化するのは2000年代からである。日系人としての身元が証明できれば日本で定住資格を得られ、家族での来日・滞在が可能である。

「類型C：フィリピンで育った日本人」は、出生時に日本人父とフィリピン人母が法律婚をしており、日本国籍を取得したものの、幼少期からフィリピンで育った子どもたちである。2008年の国籍法改正にともない、生後認知で日本国籍を取得した子どもも含まれる。親の離別に伴い、フィリピンの祖父母宅に預けられ、日本で働く母親から送金を受け取り暮らすこともあれば、母子ともにフィリピン在住で困窮生活を送る事例もある。後者の場合、人材派遣会社から渡航費貸付を受けて日本へ帰還し就労・生活する事例が近年増えている。

なお、インタビュー対象者の内訳は、類型Aが9人、類型Bが1人、類型Cが4人であった。サンプル総数は少ないものの、類型Aが比較的多くなった理由は、現在すでに20歳以上の若者をインタビュー対象としたことにある。2013年現在、在日フィリピン人女性の最多年齢層は40代半ばである。彼（女）らの前夫（内縁含む）との子が10代後半以上となり、インタビュー対象にはこの類型に当てはまる者が多いと思われる。類型Bは、フィリピン日系人だが、その人口は在日フィリピン人の中では比較的少ないため、来日する子どもの数もまだ多くない。類型Cは、2008年の国籍法改正後、増加していると予想されるが、10代のうちに来日して日本で通学の後、現在すでに20歳以上の者はまだ多くない。

以下に、在日フィリピン人1.5世代の青少年がたどった、来日から日本での定住、学校生活、進路について、彼（女）らの語りを引用しながらみていこう。なお、人物名はすべて仮名である。

4. 1.5世代の子どもたちがたどった道

4.1 来日前

フィリピン人母の前夫との子どもたち（類型A）には、母親不在の幼少期を過ごしたという事例が多い。類型Aの母親の多くは日本へエンターテイナーとして出稼ぎに行き、職場などで知り合った日本人男性と結婚している。母親が日本にいる間、子どもたちは祖父母宅へ預けられたり、住み込みの家事労働者などに世話してもらって

る。そして、日本人継父が子どもの呼び寄せに協力的となって初めて、1.5世代の子どもたちの来日がかんう。

ここで重要なのは、「母親が日本で出稼ぎをしていた」という事実である。十分な仕送りがあれば子どもたちはフィリピンで比較的豊かな生活ができ、私立学校で高い水準の教育を受けられた。なお、フィリピンでは公立学校よりも私立学校のほうが学校の設備が良く教育水準も高い。中には私立のインターナショナルスクールに通っていた子どももいる。私立学校は英語を主要な教授言語としており、ここでの学力形成(特に英語力)が後の資源になるのである。

フロールさん(類型A)：(フィリピンでは叔父宅に預けられていたが)食べたいものも食べられたし、学校でもそんなに困ってなかったのだから、たぶん良い暮らしだったのかも。それも親のおかげだと思いますね。そのおかげでそういう生活ができたんだと思いますね。…フィリピンって(家の中で)そんなに部屋が分けられていないので、大人が話せば聞こえるし、…(叔父の稼ぎだけでは)お金が足りなかったっていう(話を聞いた)。じゃ、なんで(自分の母が)働きに出ているのかって言ったなら、お金のため、みんなのためになっちゃうじゃないですか。そこは子どもなりに結構わかってたっていうか、気づいてたっていうんですかね。

ハンナさん(類型A)：そうですね、(暮らし向きは)結構、中ぐらいなんですよ。お母さんが日本に出稼ぎに来てのおかげで仕送りもしてくれて、本当に困ってなかった、私は。家も(アパートではなく)一軒家だし、で、インターナショナルスクールだったんですよ。私立の。ここ(日本)に来るまでずっとそこで。で、送り迎え付きだったんですよ、車で。お小遣いも毎月もらってるし、好きなもの食べてるし、普通に不自由ないですね。

日系フィリピン人(類型B)の場合も、両親が先に来日して共働きをし、呼び寄せ時には経済基盤を確立していることが多い。したがって、フィリピンでの子どもたちの生活は比較的豊かである。例えば、リンダさんの両親は彼女が小学1年生の頃に日本へ行った。小学校1年生から3年生まで、彼女はフィリピンで1クラス40人学級の公立小学校で勉強していた。その後、日本からの仕送りが増え、3人きょうだい全員が、1クラス10人の少人数制ですべての授業を英語で行う私立小学校に編入したという。生活面でも、日本へ呼び寄せられるまでは祖母と一緒に住み、遠い親戚が家事労働者として毎日家に来てリンダさんらの面倒を見ていたそうだ。

一方、日本からの仕送りがない家庭では当然のことながら十分な教育投資ができない。イアンさん(類型A)の母親は日本人男性と結婚しており、在留資格は安定して

在日フィリピン人の1.5世代

いた。しかし夫は子どもの呼び寄せには非協力的で、家計は苦しかったため、フィリピンへの送金は少額だった。母からの送金が途絶えていた頃、イアンさんの長兄はフィリピンのハイスクールを中退してマニラの都市下層地域でペディキャブ（自転車タクシー）のアルバイトをしながら家計を支えていた。イアンさんと彼の次兄は公立学校に通っていた。その後、母親は離婚し、別の日本人男性と知り合い再婚。再婚相手は息子3人の継父となることを承諾してくれ、彼らを日本へ呼び寄せた。

また、ノリさん（類型C）は、フィリピン生まれで、彼が2歳の時に両親が離婚した。父親から養育費の送金がなかったので、家計を支えるため母がエンターテイナーとして再来日していた。母からの送金があったため、小学校までは私立に通っていた。シングルマザーでも母親の出稼ぎにより一定の収入があれば一家は生活ができていたのだ。しかし、2005年に日本の法務省が在留資格「興行」の発給基準を厳格化したことにより、母の職歴が基準に満たず、日本に行けなくなってしまった。母はフィリピンで店員として働き始めたが生活は苦しく、子どもたちは公立のハイスクールに転校し、その後、来日している。

Maruja Asis (2006) がフィリピン全国で行った量的調査によると、親が移住労働をしていない子に比べて、親が移住労働をしている子の方がむしろ幸福度指標が高く、特に学校での成績は良いという結果が出ている。来日前の1.5世代の多くも、日本にいる母親からの送金が教育資金となっていたことがわかる。事情により送金が止まってしまったイアンさんの事例を除けば、みなフィリピンでは私立学校に通い、良い教育を受けていたということが言える。

4.2 移動のプロセス

1.5世代の子どもたちの来日は、必ずしも自発的なものではない。日本に短期間遊びに行くだけかと思って飛行機に乗ったら、そのまま日本で学校に入れられたと理解している子どももいた。9歳で来日したジョーダンさんと10歳で来日したフロールさんは以下のように語る。

ジョーダンさん（類型A）：（インタビュアー：9歳のときに、行くことが決まって、その時はどういう思いでした？）いや、俺、別になんか、日本だーって感じだったかなー。ま、別に特に…うん、なんもなかったな。ただ嬉しかったのは嬉しかったけど。初めなんかどっちかっていうと、なんか休暇かなんかかな、と思ってたんで。ようやく日本行ける、わーって感じで行ったんですけど、あれ、日本？フィリピンに帰れなくね？って。そう、フィリピンに帰れなくなったから、あーこのままか、って。…休暇だと思ってたらずっとそのままだっという。

フロールさん（類型A）：（インタビュアー：親が日本に行ったから、いつか自

分も日本に行くんじゃないかと思っていた?) 私が生まれ育ったのがフィリピンだったから、ああ(日本に)遊びに行きたいなあと思ってたら、(親が一時帰国した時に)「あなたも行くわよ」みたいに言われて。私も遊びのつもりで来たんですよ。だから多分、2週間くらい行けばそれで終わりかなと思ったら、まさかの小学校にも入れられて、みたいな感じでした。…あれはちょっと本当に大人に騙された感じです。…私も知ってたら、友達にもちゃんとバイバイできたのに、親の大人の事情っていうんですか。…(フィリピンでの)それまでの環境を手放すってことは、10歳でもやはり、いきなり環境が変わると、びっくりするし嫌じゃないですか。だから、あえて、そうしてたんですよ。親とか周りの人も分かって、「遊びに行くよ」という風に言ってくれたんだと思います。

一方、13歳で来日したダイアナさんや14歳で来日したノリさんの語りからは、来日することが自分にどのような影響があるのかを、来日前すでに考えていたことがわかる。

ダイアナさん(類型A)：お母さんが(継父と)結婚した時にフィリピンで結婚式をしたんですよ。その時に「一緒に(日本へ)行く?」と聞かれてたんですけど、お母さんなんで、行こうかなって思ったんですよ。…フィリピンの生活にちょっと飽きちゃって。…だからそんなに無理矢理に連れて行こうという考えはなくて、お母さんは、やっぱり一緒に暮らしたいからっていうのはあったから、それで一緒に来たんですよ。…(母親が日本へ出稼ぎに行くうちに病気になったので)だからもし(継父と)結婚すれば家計も安定するのかなって思って、(結婚を)オッケーしたんですよ。だから全然反対もしなかったし、その時は。

ノリさん(類型C)：最初は楽しみだった。だんだん自分の意見が二分されてきて。…ハイスクールになって、お母さんが「日本に行ける」って言い出して。でも最初は楽しみだったのが、3年生になってなんだか行くのが嫌になった。(インタビュアー：なぜ?)怖くて。もしかしたらここ(日本)が好きになれないかもしれないし、お母さんが「3年~5年は帰国できない」って言ったから。…ハイスクールももったいない。もし帰ってもハイスクールにはもう行けない。(インタビュアー：お母さんには「行きたくない」って言ったの?)言ったけど、「ワガママ言わないの」って言われて。…僕のお願いは拒否されたんだ。でも怖かったけど、ここに来たいとは思っていた。行きたいような行きたくないような、そんな感じ。

ダイアナさんやノリさんからの事例から、来日した年齢によって、親の説明の仕方

在日フィリピン人の1.5世代

や子どもの受け止め方も異なるということがわかる。これは同じ親を持つきょうだいでも移住という出来事の受け止め方が違っていたり、その後の日本社会への適応に差が出てきたりする背景となるだろう。

4.3 来日後の生活

4.3.1 再婚家庭での適応

1.5世代の来日から適応期間は思春期にあたる。特に類型Aの子どもたちにとって、彼（女）らの来日は、それまで長年にわたり離れて暮らしていた母親と同居するという「家族再統合」の始まりでもある。そして、母親と同居し「娘」や「息子」という家族内役割を学習していく。しかし、彼（女）らにとって、母親の再婚家庭への参入と適応、日本語能力・学力形成の同時進行は負担が大きい。

Yen Le Espiritu (2003) はフィリピン系アメリカ人の家族の特徴として「移民の母親と2世の娘の複雑な関係」を挙げているが、同様に、日本に住むフィリピン人母と1.5世代の娘の母娘関係の再構築も極めて難しい。母親に対して距離を感じて思うことを言えない、あるいはフィリピン式に「厳しい」家庭内規則に反発を感じるという語りは多い。

グロリアさん（類型A）：今、後悔してます、結構。…やっぱり、お母さんのことしか考えてなかったなーって。小っちゃい頃から、（お母さんが）大変な思いして仕事して、「あなたのために（お母さんが日本で働いているから、フィリピンで）こういう裕福な暮らしができているんだよ」って、おばあちゃんとかからも言われていたので。…でも、（母親に）自分の言いたいこと言えばよかった、とか。（でも言えなかったのは）とりあえず、お母さんを傷つけないって言うか。

ハンナさん（類型A）：（反抗期は）やばかったですね、お母さんとは。（生みの親だが）育ての親じゃないって言ったじゃないですか。だって、10年以上、離れて（暮らして）て、いきなりプツって、家族です、一緒に暮らします（と言われて）。もう、そのあとがギャップで。私が知ってたお母さんと、お母さんが知ってた私が違うらしく、そこでぶつかって。「こんな子じゃないよね、あなた」みたいな。…お互いを知らなかったんですよね。あと、お母さん自身が（私を）育ててないから、あんまりお母さんっぽくなかったですね。…私の意見が口答えのようにしか聞こえなくて、「親に向かって何言ってんの」って感じで（言われた）。

類型Aの場合、ここで重要となるのが、日本人継父の役割である。フィリピン人妻の連れ子呼び寄せることに同意するのだから、彼らも子どもたちに理解があるのだろう。協力的な継父の場合、家計の担い手として子どもの教育資金を提供し、フィリピン人母の日本語能力に不安がある場合は、学校との連絡役となる。

ブライアンさん(類型A)：(日本人の継父は自分を)愛してくれる。すごいオープンな人なので、あんまり自分のやりたいことに反対しない。逆にお母さんが反対しても、お父さんが反対してくれない。すごい良い人なので、いつも笑ってくれるんです。(自分が)悪いことして、で、お母さんに怒られても、(継父は)笑って「大丈夫だよ」って。「前向きにやればいい」って言うってくれる方なんです。(多少、悪さをして)「若いからしょうがない」って。味方になってくれる。

4.3.2 学校生活

多くの子どもたちは、来日後まもなく日本の学校に通う。いわゆる「日本語指導が必要な児童生徒」となるわけだが、彼(女)らへの支援態勢は各都道府県や市町村によってかなり異なる。一般的には、学校が手配した学習支援者(日本語が堪能な在日フィリピン人、あるいは非常勤の日本語講師)から日本語指導を受けながら日本語を学ぶ。外国にルーツをもつ子どもが多い学校では、適応教室(日本語教室や国際教室)が併設されており、いったんそこへ入ることも多い。外国人が少ない地域に住んでいたジョーダンさん(類型A)は、来日後半年は別室で行う「取り出し授業」で日本語教師による日本語指導を受けたが、その後は普通教室で授業を受けたという。外国人集住地域の中学校に入ったマイケルさん(類型C)は、週に2度、日本語指導のセンター校に通い、韓国人や中国人と一緒に日本語を学習した。

教育社会学の先行研究でも指摘されているように、来日後の学校教育における学力形成は、家庭での教育的支援の有無が左右するところが大きい(敷田 2013; 三浦 2013)。また、額賀(2012)が指摘したように、子どもに教育達成を望んでも、家庭学習の支援ができない在日フィリピン人家庭も多い。子どもの教育達成には、塾や公文式といった学校教育以外の場での教育投資が可能かどうか、家計の担い手である日本人継父がどれほど子どもの教育に関わるか(学校との連絡、進路情報収集等)という要因も大きい。

フィリピンで教育を受けていた1.5世代には、漢字圏出身の生徒に比べて日本語学習が不利である一方で、英語運用能力が文化資本になる。中学校の英語教師(日本人および外国人の英語指導助手)がキーパーソンとなって高校進学への道筋をつけることもある。英語が堪能なフィリピン人の生徒は英語教師とコミュニケーションをとりやすいからである。英語教師から英語検定やスピーチコンテスト出場の勧めがあり、高校の推薦入試へつながったという事例が少なくない。

在日フィリピン人の1.5世代

ブライアンさん（類型A）：中学校のときにスピーチコンテストに出てたりして。それ利用して…（インタビュアー：推薦みたいな？）はい、そうです、（高校入試は）推薦です。…でも、無理やり（コンテストに）出されただけなので、学校の代表として。…（出場を勧めたのは）ALT（Assistant English Teacher=英語指導助手）の先生。すごい仲良いので、いろいろ話してて。

グロリアさん（類型A）：たしか中学校の時に、英語のスピーチコンテストみたいなのがあったんですけど、そのときに1位をとれたので、それを自己PRに書いたんですね。それが良かったのか、面接でなんとか（単位制の県立高校の普通科に合格した）。

一方、英語ができることがいじめの火種になったという事例もある。

ジョーダンさん（類型A）：高3になって、なんかみんなピリピリしてんのか、わけわかんないけど、なんかそういうのがあって英語の授業の時に一回あって、なんか自分は英語ができるんで、そこまでなんか聞いてなかった…いや聞いてはいたけど、だけどある程度わかってるし、そういうときちょっとみんなとは別のやつをやってたんで、…みんなにそれが目について、まあなんかこう…「できるからってなにやってんだよ」って感じで、なんかもう…「フィリピンに帰れ」だとか、その「帰れ帰れ」だとか…それ、きついよー。なんか、30何人対1だからね。

ジョーダンさんはクラスの中ではこうしたいじめを経験しながらも、外国人の生徒が集まるクラブと弓道部に所属し、そこで部活仲間や顧問の先生たちとの人間関係をうまく築いていた。

日本では、特に小学校高学年から中学校にかけて、学校生活が子どもの一日の大部分をしめる。中学校では、課外の部活動への参加が必須である学校も多く、教科学習と同等に重視されている。スポーツが得意な子どもならば、多少、日本語が不自由でも部活動を通じて仲間の輪に入って行けるだろう。すなわち、部活動への参加は、子どもを学校社会へ統合する要因ともなる。逆に、部活動でトラブルがあると、学校の中で居場所を失う要因ともなる。ダイアナさんの事例をみていこう。

ダイアナさん（類型A）：（中学校のテニス部で）そうですね、（シカトが）中2から始まっちゃって。でも私だけじゃなくて、なんかターゲットが決まっているらしくて、それは。…結局、自分も友達ができて、自分のペアで仲良くさせて

もらってたし。でもその時に、勉強もすごい大変だったんで、もう学校に行くのやめようと思ったんですよ。…シカトもあるし、全然楽しくないし中学、みたいな。その時に、どうしようかなって思って、(フィリピンに) 帰ろうと。…もう帰る手配もしていたんですよ。(しかし、次の学期になるといじめはなくなった。)

4.3.3 中学卒業後の進路

高校進学は大きな成功体験となり、ターニングポイントとなる。調査対象者は、居住する都道府県に外国人の高校入学特別枠(来日から3年以内の生徒は3科目受験など)を利用して入学したものが大半であった。しかし都道府県によって入試制度が異なるため、外国人生徒の高校進学率は都道府県によって差が出てきてしまう(田巻松雄 2012)。ノリさんのように中学2年の途中で来日し、受験への準備が間に合わないという理由で高校に進学できず、中学卒業後に就職した事例もあった。また、エミリーさんやチェリーさん(いずれも類型A)のように、高校には入学したが主に経済的な理由から卒業できず中退した例もみられた。しかしチェリーさんは、その後フィリピンに帰国し、現地の大学に入学する。

こうした1.5世代の多様な進路を整理するため、以下、在日フィリピン人1.5世代の聞き取りから、中学卒業後の彼(女)らの進路をおおまかに4つに類型化した。「日本定住型」、「フィリピンで大学進学型」、「日本で大学卒業後、グローバル人材型」、「第三国への移住希望型」である。

(1) 日本定住型

ブライアンさん、エミリーさん、フロールさん、グロリアさん、イアンさん、ノリさんがこれにあたる。6人中3人が調査時に日本へ帰化申請中あるいは帰化済であった。彼(女)らは高校卒業後に比較的安定した職に就いているという共通点もある。

ブライアンさんは高校卒業後に派遣社員として工場労働をしていたが、その後、人材派遣会社の正社員(社内通訳)として採用された。グロリアさんは高校卒業後、郵便局に就職した。その後、結婚し、調査時(当時21歳)すでに子どもが2人いた。同じくイアンさんも高校卒業後に正社員として自動車製造会社に就職している。18歳時点で安定職と定収入を得ると、将来設計がしやすく家族形成も早い。安定職につけるということは、日本語習得が進んだ証でもある。日本への言語的同化と長期的雇用見通しがたち、帰化へつながるのではなかろうか。

一方、彼(女)らは、6人ともに大学に進学していない。学力の不足というよりは、家庭の経済事情がその主な原因であることが語りから浮かび上がる。

イアンさん(類型A)：(高校卒業後就職したが)「将来の夢は、やっぱ大学に入りたかったですね。医者になりたかったです。おばあちゃんがいつも、言い続

在日フィリピン人の1.5世代

けていましたから。医者になりなさいって。」母親「カネない。日本の医者（になるための教育は）高いよ。

フロールさん（類型A）：一回、通訳とかそういう関係の仕事もやってみたいなとか、憧れてた時期もあったのですが、でもちょっと経済的に大変だったので、大学とか行けなかったの。で（高校は卒業し）ハローワークに行き資格を（とった）。前から介護関係に興味があったので、高校の時も介護関係の授業あって何回か実習に行ったりもしてたので、それを続けようと思って…今も学校（注：職業訓練校）に通ってます。

(2) フィリピンで大学進学型

日本で高校を中退あるいは卒業した後にフィリピンで大学進学をする事例もある。アイダさん、マイケルさん、ケイトさんの3人だ。アイダさんは日本で短期大学を卒業後、フィリピン国立大学に入学した。また、マイケルさんは日本で高校卒業後にフィリピンの有名私立大学を受験して進学している。また、ケイトさんはアメリカの大学に行きたかったが、同じく学費が高いという理由からフィリピンの大学に進学した。彼女はフィリピンの大学在学中、日本の国立大学に「交換留学」を果たし、かつて入試制度と経済的な理由から断念せざるを得なかった、日本での大学生活を留学生として経験している。

アイダさん（類型C）：（インタビュアー：フィリピン国立大学を選んだ時に、日本の大学というのは選択肢になかったの？）高いんですよ、学費が。（フィリピンで大学を卒業したら）日本に帰ってきます。（インタビュアー：そして英語を生かせる仕事を探す？）そうですね。（アメリカに行ってみたいという気持ちは）まだあります。（将来は）いろんな所にいると思います。フィリピンにも日本にも留まらないと思いますね。寒い国はいやだけど。（世界を）知り尽くしたい、見尽くしたいっていうか、とにかく全て知りたい、見たいっていう（気持ちがある）。

マイケルさん（類型C）：高2の時は、日本の大学を受けるつもりでした。国立大学。…やっぱり高3ぐらいに入ってから、（大学を）見学に行ったんですよ。ちょっと何ていう、全くっていうか、ちょっと違うなって思っ。やっぱりあの、高校の頃から、英語の授業がものすごい嫌だったんですよ。…あのー、何て言う、基礎的っていうか、すごく簡単で、それで受験し甲斐がなかったっていうふう感じたんですよ、ぼくは。（インタビュアー：もうフィリピンの大学に行こうと思って？）そういうことになりましたね。3年上がる頃に…その時はH先生

にまた反対されました。…英語（を使って）日本で仕事をしろって言われて、法学部とか受けたらいいんじゃないとか言われて。実は、文学部に行きたかったんですよ。（でも）文学部で、日本語で（勉強を）やるっていうのにちょっと違和感があって、そのためにちょっとフィリピン（の大学）に行ったんですよ。英語の先生になりたいくて。

フィリピンでの大学進学を考える典型的な理由は、「日本の大学教育は費用が高いから」というものである。来日前にフィリピンで学習言語を獲得していたことで、フィリピンでの大学進学は彼（女）らにとって実現可能性が高い進路となるのだ。上記事例の進学先はいずれもフィリピンではトップクラスの大学であり、フィリピンでの進学は決して消極的な選択ではなく、大いに評価される進路なのである。

(3) 日本で大学卒業後、グローバル人材型

日本での大学進学は、経済的な事情が許せば、推薦入試やAO入試で可能となることが多い。14人中、日本で大学を卒業したのはダイアナさん、ハンナさん、ジョーダンさんの3人である。ハンナさんは公立大学卒業後、精密機械メーカーに就職した。海外に多くの支社を持つ会社で、今後は海外出張もあるという。また、ジョーダンさんは私立大学を卒業後、同じく世界各地に支社を持つIT系の企業に就職し、システムエンジニアとなる予定だ。現在の日本が必要とする、グローバルに活躍できる人材となった人たちが彼（女）らである。

ハンナさん（類型A）：（就職先は）地元のすごい小さい会社なんですけど。来日して8年っていても、結構（就活は）難しいんですよ。Webテストとかも、問題を理解するまでに終わっちゃってて、何もできなくて。（就職に）日本在住の外国人枠っていうのは無かったんで、難しかったですね。無理じゃないかって諦めた時に、たまたまその会社が募集してて。…面接のときに社長と会って、話したら気に入られて、それで内定いただいて。小さな（製造業の）会社なんですけど、取引先がほとんど外国で、だから社内公用語が英語なんです。海外にも新店舗っていうかオフィスを開きたいらしくて、「行きませんか」って言われて。

ジョーダンさん（類型A）：（SEとして日本の企業で就職が決まったが）一定のところにいるのは嫌なんすよ、俺。これからも転々としていこうかな、と思ってる。日本、アメリカ、中南米、どこでもいいよ。…だから自分が自信があるんですよ、対応できるっていう自信が。（今の会社は）何年かたてば異動って感じなんですけど、その後、アメリカの大学に入って勉強して、そこから海外で就活して、またある程度年数重ねて、ゆくゆくは自分の企業立ち上げたいというのは、

在日フィリピン人の1.5世代

絶対にあるんですけど。40代までには俺、絶対に立ち上げるとってます。(アメリカでMBAも) とりたいうす、とりたいうす。

(4) 第三国への移住希望型

近い将来、日本以外の国へ移住したいという希望を持つ1.5世代は多い。その傾向が強かったのがチェリーさんとリンダさんであった。チェリーさんは日本の高校を中退したが、フィリピンで大学に進み、卒業して28歳の時にまた日本に戻ってきた。若くして日比両国での生活を経験した彼女は、日本にこだわらずとも、アメリカや英国にも行きたいという。チェリーさんの場合は「フィリピンでの大学進学型」から、さらに「第三国への移住希望型」へと移り変わった。また、リンダさんは日本の大学に通い、帰化申請もしていたが、彼女の叔母がいるアメリカでの生活に憧れが強い。いずれも、現地で暮らす親族の存在が、そのモチベーションを後押ししている。

チェリーさん(類型A)：ここ(日本)での生活を終わったら、アメリカに行けたらいいな。アメリカにはたくさん親戚がいます。ロンドンにも行きたい。ロンドンにも親戚がいます。おばあちゃんになったら、フィリピンに帰ります。日本だと歳とったら面倒を見てくれる人があまりいない。ホームレスは嫌だから。

リンダさん(類型B)：私が小学校の時から、ずっとナースになりたくて。お母さんの夢がアメリカでナースになることだったので、私がそれを聞いてから、小さい時からずっとそれを…お母さんの代わりにそれをしたいと思っていたので。だからフィリピンで学校へ行きたかったんですけど、日本に来てって言われたのでそれもなくって。私がナースになってアメリカに行って家族を連れて(呼び寄せて)住みたかったです。…多分、おばちゃんがそうだったし、お母さんもそうしたかったのが、家族がいろいろあって日本に来たので。多分おばちゃんに憧れてそうしたかったのかと。

5. 考察

以上で見てきた事例から、在日フィリピン人1.5世代の特徴は、(1) 来日前フィリピンでは比較的高い水準の教育を受けてきたことによる「学習言語＝フィリピン語／英語を獲得してからの来日」と、(2) 「長年一緒に住んでいなかった母親や母親の再婚家庭との再統合」の2点にまとめられよう。

(1) の教育に関しては、日本では日本語を獲得しなければ学校での教科学習に追いつけないため漢字文化圏出身者に比べてフィリピン出身者は相対的に学力形成が不利な状態にあることが指摘される。しかし、フィリピンで英語運用能力という文化資

本を獲得していることにより、経済的な条件がそろっていれば高校や大学への進学
の経路がひらけ、卒業後はグローバル人材となったり、第三国への移住という選
択肢もあるのが強みである。

(2) の家族との再統合は、来日後に再婚家庭への参入と適応が必要となるがゆえ
に、フィリピン人母との母子関係再構築が来日当初の課題となる。なかには、調
査当時においても母親とは断絶状態という1.5世代の青年もいた。また、日本
人の継父は、家計の大黒柱となる人物である。継父との関係が良好ならば、子
どもへの教育投資に協力的となり、また母親に代わり学校との連絡役や進路情
報収集役ともなる。日本社会への「窓」として、日本人継父は重要なのである。

次にここで議論したいのは、「子どもにとっての移住という選択」、「日本での定
住と帰化」、「第三国への移動」の3点である。

第一に、「子どもにとっての移住」は、必ずしも本人の自発的選択ではなく、親
に伴われ、あるいは親の判断によるものだったことだ。子どもたちは、愛着対
象だった祖父母や友達と別れて来日している。そして、来日後は再婚家庭へ
の参入、学校社会への適応、日本語習得、学力形成と、課題は山積みだ。自
分がおかれた状況を受入れ、それに向き合い課題に対処できたのが日本で
の高校進学が可能となった子どもたちである。一方、この段階で挫折してし
まう子どもたちも、もちろんいる。本論では十分にこの点を論じることが
できなかったが、彼(女)らを挫折させる個人的/社会的条件を今後明らか
にする必要がある。

第二に、「日本での定住と帰化」だが、高校卒業後に比較的安定した職につ
けた人たち(グロリアさん、ブライアンさん、イアンさん)は、日本での帰
化を考えている(あるいは、すでに帰化している)。18歳で安定職を得た
彼(女)らは人生設計を立てやすく家族形成も早いと思われ、第三国への
移住よりも、日本で長期的に暮らすことが考えられるのだろう。しかし、
1.5世代の若者たちにとって帰化は必ずしも定住と日本への忠誠心を意
味するわけではない。日本国籍を取得することにより、フィリピン国籍
よりも査証免除で渡航できる国が増え、海外への移動に選択肢が格段に
広がるのである。さらには、フィリピンから家族の呼び寄せも容易にな
る。帰化は今後の自分の将来計画を念頭においた若者たちの能動的な戦
略なのである。

第三に、大学進学を果たした人びとは「第三国への移動」を考える傾向に
ある。上に紹介したチェリーさん、リンダさんのほかにも、ジョーダン
さん、イアンさん、マイケルさんも別の国に行きたいという希望を語
っている。一つの要因は、徳永(2008)が指摘したとおり、アメリカ
などで暮らす親族の存在があるだろう。もう一つの要因として、日本
での生きづらさや閉塞感があるのではないか。つまり、フィリピンに
いた頃は中間層以上の暮らしをしていた1.5世代には、来日後の学
校生活やフィリピン人の母親へ向けられるまなざしなどが日本を窮
屈に感じさせる。フィリピンでの生活体験もあるので、同国で自分
が社会人として経済的に成功することの難しさも

理解しており、ならば第三国へという志向性が生まれると思われる。

6. 結論

本論で提示した事例の多くは、いわば学歴達成の「成功例」だが、それはあくまで個人の努力、家族内での資源配分、学習支援ボランティア、高校入試の特別枠、フィリピンおよび日本での教育に生かせる経済的・人的資源などの偶然が重なって可能になっていることを強調したい。また、来日前後の家族内の安定が子どもの精神的安定につながり、はじめて教育達成が可能となる。調査対象者の家庭では、母子関係の葛藤や反抗期があったものの、家庭内暴力やネグレクトといった状態は聞かれなかった。したがって、「日本を通過点とすること」が可能となる家庭的背景にも留意する必要があるだろう。

日本を「通過点」とするか否かは、来日前の学力形成と英語圏で暮らす親族の存在に関係していることが示唆される。やはり来日前の幼少期に基礎学力と英語運用能力、そして学習習慣を身につけられたかが、来日後の教育達成にも現れると言えよう。フィリピンで学習言語を獲得していることで、フィリピンやアメリカ等の英語圏で大学進学、あるいは大学卒業後に英語圏へ移住し就職する等の選択肢があるのが、在日フィリピン人第1.5世代の強みである。実際には今すぐに第三国へ移動できなくても、その「可能性」を持っていることが心の余裕となり、日本人よりも選択肢があるという自信となって、彼（女）らの日本での生活を精神的に支えていると言える。

上に「大学卒業後グローバル人材型」「第三国への移住希望型」と示した事例は、日本では「ものたりない」人たちなのである。もちろん、フィリピンで大学進学後に、あるいは第三国へ定住した後に、いわゆる「グローバル人材」となる人たちも出てくるだろう。彼（女）らの第三国への移住を含めて長期的に観察する必要がある。これまでの「学齢期で移動することがいかに不利か」という議論から、「グローバル時代において2つ以上の国で教育を受けることがいかに有利に働くか」を実証するモデルを構築することを目指している。今後の課題としたい。

参考文献

- Asis, Maruja, 2006, "Living with Migration: Experiences of Left-behind Children in the Philippines." *Asian Population Studies*, 2 (1): 45-67.
- Commission on Filipino Overseas, n.d., "Number of registered Filipino emigrants by country of destination and age group (13-19): 1988-2012". (unpublished data).
- Espiritu, Yen Le, 2003, *Homebound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries*. Berkeley: University of California Press.

- 原めぐみ、2011、「越境する若者たち、望郷する若者たち：新日系フィリピン人の生活史からの考察」『グローバル人間学紀要』(4): 5-25.
- Hara, Megumi, 2013, "Mixed-heritage Japanese-Filipinos/Shinnikkeijin in Charge of Intimate Labor", *Journal of Intimate and Public Spheres*, 2 (1): 39-64.
- 三浦綾希子、2013、「フィリピン系ニューカマーのネットワーク形成と教育資源：家事労働者の母親に注目して」『異文化間教育』37: 116-126.
- 長坂格、2013、「フィリピンからの第1.5世代移住者——子ども期に移住した人々の国際比較へ向けての覚書」上杉富之編『グローカリゼーションと越境』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、49-83.
- 額賀美紗子、2012、「トランスナショナルな家族の再編と教育意識：フィリピン系ニューカマーを事例に」『和光大学現代人間学部紀要』5:7-22.
- 大曲由起子・高谷幸・鍛冶致、2011、「在学率と通学率から見る在日外国人青少年の教育--2000年国勢調査データの分析から」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』(8): 31-38.
- 佐藤郡衛、2010、『異文化間教育：文化間移動と子どもの教育』明石書店.
- 敷田佳子、2013、「国際結婚家庭の教育に関する現状と課題：結婚移住女性に焦点をあてて」『移民政策研究』(5): 113-129.
- 高畑幸、2011、「在日フィリピン人の1.5世代——教育と労働が隣り合わせの若者たち」『解放教育』41 (10) : 54-63.
- 高畑幸、2012、「在日フィリピン人研究の課題——結婚移民の高齢化を控えて」『理論と動態』(5): 60-78.
- 高畑幸、2013、「日本人移民の子孫と国際婚外子」蘭信三編著『帝国以後の人の移動——ポストコロニアリズムとグローバリズムの交差点』勉誠出版、935-968.
- 高谷幸・大曲由起子・樋口直人・鍛冶致、2013、「2005年国勢調査にみる外国人の教育：外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』(35): 59-76.
- 高谷幸・大曲由起子・樋口直人・鍛冶致、2013、「2005年国勢調査にみる在日外国人の仕事」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』(35): 39-58.
- 田巻松雄、2012、「外国人生徒の高校進学問題：入試配慮に焦点を当てて」『理論と動態』(5): 79-93.
- 徳永智子、2008、「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望—『重要な他者』と『来日経緯』に着目して」『異文化間教育』(28): 87-99.
- 矢元貴美、2013、「学校生活におけるフィリピン人の親を持つ子どもたちの困難と喜び：日比両国の学校生活を経験した子どもたちの視点から」『グローバル人間学紀要』(6): 5-26.

在日フィリピン人の1.5世代

文部科学省ウェブサイト (2014年2月5日アクセス)

http://www.mext.go.jp/b_menu/hou_dou/25/04/_icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1332660_1.pdf.

本稿は、科学研究費助成研究(基盤B)「フィリピン系移民第1.5世代による社会生活の構築に関する比較研究」(2012-2014年度、代表者: 広島大学・長坂格)、および同「移民第1.5世代の子ども達の適応過程に関する国際比較研究——フィリピン系移民の事例」(2009-2011年度、代表者: 広島大学・長坂格)の成果の一部である。いずれも高畑は研究分担者、原は研究協力者として参加している。本稿は、高畑による Philippine Studies Conference in Japan (2014年3月1日)での報告英語論文の日本語版に加筆修正したものである。また、高畑による東京外国語大学多文化社会実践研究・全国フォーラム(2013年11月30日)での報告内容とも一部重複する。なお、本稿に引用している聞き取りデータ14件のうち7件は高畑が、7件は原が聞き取りを行ったものである。本稿作成にあたっては、高畑が草稿を作成し、原がそれに加筆修正を行った。第5章および第6章は、両者で協議の上、最終稿とした。